

渡辺一夫氏の評論『寛容は自らを守るために不寛容に対して不寛容になるべきか』を読み直す

2014年6月19日
甲南大学経済学部教授 中島清貴

経済学部にて、リレーエッセイという企画が一昨年の12月より始まり、私も折をみて楽しみながら諸先生や事務職員の方々のエッセイを拝読させていただいてきた。

私自身が楽しんでばかりであっては経済学の言葉で言う「フリーライダー」になってしまうので、渡辺一夫氏の評論『寛容は自らを守るために不寛容に対して不寛容になるべきか』を読み直す中で、ここ最近考えていることをエッセイにしたいと思い文章を認めることにした。

以下、駄文をお許し願いたい。

健康の維持やストレスの発散も兼ねて、夕方になると自転車で芦屋浜まで行き、夕陽の沈む海をみながら散歩をするのが今の私にとって至高の時間となっている。

散歩をしながら考えていることの多くは御世辞にも高尚なものとは言い難いものであるが、最近散歩をしながら考えていることとして、自分以外の他者が不本意にも「衝突」してきた際、そうした相手に対して「寛容である」ということとは一体どういう事なのだろうか、という問いを立てている。

人間生きていたら、他者との「衝突」というのは避けることが出来ない。

特に、その場を「収める」ことを社会的な規範として無意識的に叩き込まれてきた標準的な日本人であれば、好き好んで「衝突」する人は少ないのではなかろうか。

私の問いの核心は、衝突してきた他者の態度や方針が明らかに「不寛容」なものである場合、そうした「衝突」の只中で、自分がその相手に対してどういう態度をとり、どのように行動すればよいのか、という点にある。

親戚関係や友人関係、仕事上の人間関係、ひいては、民族間の関係や国と国との国家間の関係に置き換えて考えてみると思い当たるふしが多々あるのではなからうか。

相手が「**不寛容**」なのに、こちらが「**寛容**」であれば、自分はとても傷つくんじゃないか、自分達が大きな損をするんじゃないか、などなど様々な側面を考慮しながら、「**生身の自分**」に置き換えて「**突き詰めて考えてみる**」ととても難しい問題である。

私が大学 3 回生のとき、ゼミの時間で、渡辺一夫氏の評論

『寛容は自らを守るために不寛容に対して不寛容になるべきか』

をテキストにして、ゼミの仲間とグループディスカッションをした。

残念ながら、その時、私がどういう意見を述べたのかは全くといっていいほど覚えていない。

一度、甲南大学の私のゼミでも渡辺氏の評論を読ませた上で、グループディスカッションをさせたことがあったが、学生からは「文章の意味がわからない」ということで議論があまり活性化しなかった苦い経験がある。

こういう私自身、学部 3 回生のとき彼の評論の内容がよく理解出来ていなかったことが、今のこの時点において議論の内容を覚えていないことの大きな一因でないかと考えている。

おそらく浅薄な学生らしく彼の評論内容が「**正しいか正しくないか**」ということにのみ焦点をあて、自らを省みることなく、口泡を立てながらディスカッションの相手を論破することにのみ血道をあげていたのではなからうか。

しかし、渡辺氏の評論を 10 数年ぶりに読み直してみて、彼の評論の内容が「正しいか正しくないか」ということに限ってみるなら、「今の私」の方が「学生時代の私」よりも「**明確な結論**」を出せなくなっていることに気付く。

彼の評論に対し、経済学者として演繹的な思考の中で Normative な結論を引き出せるか否か、ということを述べているのではない。「**矮小な生身の人間**」として彼の評論を読む中で、ある種の「**戸惑い**」を私に感じさせる箇所があることを述べているのである。

以下、渡辺氏の評論の中で私にとって「**核心**」とも言える箇所を抜粋させていただきたい：

「僕は、人間の「**想像力**」と「**利害打算**」とを信ずる。
人間が「**想像力**」を増し、更に「**高度な利害打算**」に長ずるようになれば、
否応なしに、「**寛容**」のほうを選ぶようになるだろうとも思っている」

渡辺一夫 『寛容は自らを守るために不寛容に対して不寛容になるべきか』

「**利害打算**」という言葉は、一見不穏ではあるものの、経済学的なトレーニングを十分に積んでいる人々にとって、渡辺氏のレトリックは受け入れやすいものではなかろうか。

例えば、ミクロ経済学やゲーム理論の中で展開されている **Cooperation** や **Reciprocity** の議論を斟酌すれば、「**高度な利害打算**」が結果として「**寛容**」な行動に通じることの可能性を見て取ることが出来る。

しかし、「**高度な利害打算**」に準じて常日頃から自らの行動を節するに、私の知性はあまりにも凡庸に過ぎる。

渡辺氏はその評論の中で「**想像力**」の必要性をも説く。

私は、愚息に“春樹”と名づけるほどに、村上春樹氏の小説を高校生の頃より好んで読んできた。

彼の小説の中で人間の「**責任**」や「**良識**」が描き出されるときキーワードとも言える概念が「**想像力**」である。

村上氏の長編小説『海辺のカフカ』の中に、主人公のカフカ少年がナチス政権によるユダヤ人のホロコーストにあたって指揮的役割を担ったアドルフ・アイヒマンの裁判について書かれた書物を読むくだりがある。

その中で、カフカ少年は、アイヒマンが**優れて実務的な官僚であった**ことを知り、彼が如何にして効率的にユダヤ人を処理することを計画策案し、実行に移してきたのか - 焼くか、生めるか、溶かすか - を知るに至る。

他方、当のアイヒマン自身は、法廷の被告席にあって**罪悪感**を抱いている様子はない。彼は、『戦争』のさなか、自分はひとりの技術者として極めて忠実に命令に従い、世界中の「**責任ある、良心的な官僚**」がやっていることと同じことをしたにすぎない、と述べる。

そして、カフカ少年は、その書物の後ろの見開きに少年の物語中の後見人ともいえる大島さんのメモ書きを見つける。

そのメモ書きには以下のような記述がなされている：

「**すべては想像力の問題なのだ。僕らの責任は想像力の中から始まる。イエーツが書いている。In dreams begin the responsibilities - まさにそのとおり。逆に言えば、想像力のないところに責任は生じないのかもしれない**」

もう一度、渡辺氏の評論のタイトルに戻ろう。

『寛容は自らを守るために不寛容に対して不寛容になるべきか』

その問いに対する答えは、私自身が不本意にも「**不寛容な他者**」と衝突してしまった時、「**生身の自分**」に置き換えた上で、様々な状況を俯瞰しながらその都度、「**心≡想像力**」と「**頭≡打算**」を働かせながら模索していくしかないのであろう。

そうした私の「思考する態度」が結果として「**寛容**」に繋がるのであれば、**私という生身の矮小な存在**がこの世界に許容される余地もあるのかもしれない。

最後に、村上氏の長編小説『海辺のカフカ』の中から再度、カフカ少年の後見人であり師でもある大島さんの言葉を以下に記し、駄文を終えたい：

「**想像力を欠いた狭量さ、非寛容さ。ひとり歩きするテーゼ、空疎な用語、篡奪された理想、硬直したシステム。僕にとってほんとうに怖いのはそういうものだ。僕はそういう**

ものを心から恐れ憎む。なにが正しいか正しくないか、もちろんそれとても重要な問題だ。しかしそのような個別的な判断の過ちは、多くの場合、あとになって訂正できなくはない。過ちを進んで認める勇氣さえあれば、だいたいの場合取り返しがつく。しかし想像力を欠いた狭量さや非寛容さは寄生虫と同じなんだ。宿主を変え、かたちを変えてどこまでもつづく。そこには救いはない。

僕としては、その手のものに『ここ』には入ってきてもらいたくない」